2025 年度　大学院入試（10 月期）　（国語国文学専攻）

修士課程　「専門科目」　（2024 年 10 月 5 日実施）

合否判定の方法　《専門科目（国語学・国文学》《外国語（英語)》《口述試験》
専門科目（100 点)、外国語（4 段階評価）および口述試験（4 段階評価）により評価する。

合否判定の基準　専門科目：60 点以上、外国語（英語)：C 以上、口述試験：C 以上のいずれも満たすこと。

《専門科目》(100 点満点)

【一】(30 点)

出題意図

国語学もしくは国文学について研究する場合に必要な、特定のテーマに沿って論じる力と基礎的知識を問うた。

正答例

《国語学専攻の受験者》……動詞の活用の種類が歴史的に変遷することについて、例えば連体形・終止形の合流、二段活用の一段化などの現象に言及しながら説明する。
《国文学専攻の受験者》……例えば古典文学の領域であれば、『万葉集』『古今和歌集』『枕草子』『源氏物語』『今昔物語集』『徒然草』あるいは絵巻物などに登場する病気・病人観や描写、近現代文学の領域であれば、梶井基次郎や堀辰雄作品に描かれる結核のような身体的な病についてだけでなく、江戸川乱歩や萩原朔太郎作品にみられる精神的な病についても説明する。

【二】(20 点)

出題意図

国語国文学研究を志す上で、この程度は身につけておいてほしいという語彙力を判定するために、漢字の書き取りと漢字の読みを問うた。また、国語国文学研究において必要な論理的文章の読解力、表現力を判定するため、記述による内容説明問題を課した。

正答および正答例

問 1　①わざわい　②ころう　③じゅうりん　④ほうちゃく
問 2　日本人は西洋文明を崇拝し理想として追い求めたということ。
問 3　文明開化以来七〇年を経て西洋文化への心酔から覚めた現在の日本には、西洋を真似た結果生じた西洋の文物の劣化版ばかりが蔓延しており、日本的なるものは跡形もなく失われてしまっているかに思

える。だが一方で我々は二千年あまりの文化を築いてきた日本人の末裔であり、その伝統が脈々と続く限り日本人は何も失ったことにはならないということ。
問 4　西洋的知性人は、西洋的知性を経てきたゆえに日本的なるものへの批評意識を持っており、かつて唐から学んで形成した文化に代わる世界的新文化を建設する希望を捨てていない。しかし一方、自らが信奉した西洋文明によって現在の日本から日本文化が失われている事実に絶望しており、西洋的知性と日本的文化の間に板挟みになって苦しんでいる。

長文出典

萩原朔太郎『日本への回帰』（白水社）1938 年

【三】（20 点）

出題意図

日本の古典文学を学び、理解する上で必要な、語彙力、文章力を判定するため、記述による内容説明・現代語訳を課した。

正答例

問1　父はひたすら娘である私を前面に出して対応させ、父自身は世間づきあいせず
問2　宮仕えのため人前に出る時の気持ちは、自分が自分でないようで
問3　私の気持ちも紛れるだろうと思う時もあったが

長文出典

「更級日記」
新編日本古典文学全集（26）『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』(小学館） 1994/8/25

【四】（30 点）

出題意図

国語国文学を学ぶ上で必要な、基礎的な文学史および国語学用語の知識を問うた。

正答例

a　記紀に登場する国つ神で、大国主命の別名の一つ。少彦名神と共に国土を完成させ、天孫降臨に際して国を譲った。
b　万葉歌人。思想性の強い「貧窮問答歌」などで知られる。
c　平安初期の歌人。六歌仙・三十六歌仙。百人一首「あまつかぜ雲の通ひ路」の作者。
d　作者不明の軍記物語。将門の乱の経緯を、和風漢文で記す。
e　摂関家の子弟である天台座主慈円が、豊富な情報と口語的表現を用いながら叙述した歴史書。
f　室町時代の能役者、謡曲作者。観阿弥の子。足利義満の支援を受けて活躍し、能楽論『風姿花伝』、談

話録『申楽談儀』などでも知られる。

g　上田秋成作。牡丹灯籠など中国小説からの翻案の多い怪異小説集。江戸時代前期読本を代表する作品。

h　江戸後期の俳人。俗語を用いた平明な句で知られ、句集に『おらが春』がある。

i　長詩「楚囚之詩」、劇詩「蓬莱曲」、評論「厭世詩家と女性」等がある。雑誌「文学界」に参加し島崎藤村らと浪漫主義文学を推進した。

j　宮沢賢治著。1924 年刊行。自らを憂悶する修羅として歌った詩編「春と修羅」や、妹としの病死を素材とした「永訣の朝」が著名である。

k　キリシタン資料の一つ。1603 年に本編、1604 年に補遺が刊行される。ポルトガル語による解説付きの日本語辞書で、室町時代後期の語彙が広く収録されている点、日本語がポルトガル式のローマ字で記されている点などに研究上の価値がある。

l　どの参与者に注目して出来事を表現するかに関わる文法カテゴリーで、接辞の付加に伴って規則的に格が交替する言語現象を指す。典型的なものとして能動態、受動態、使役態がある。